

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987
4

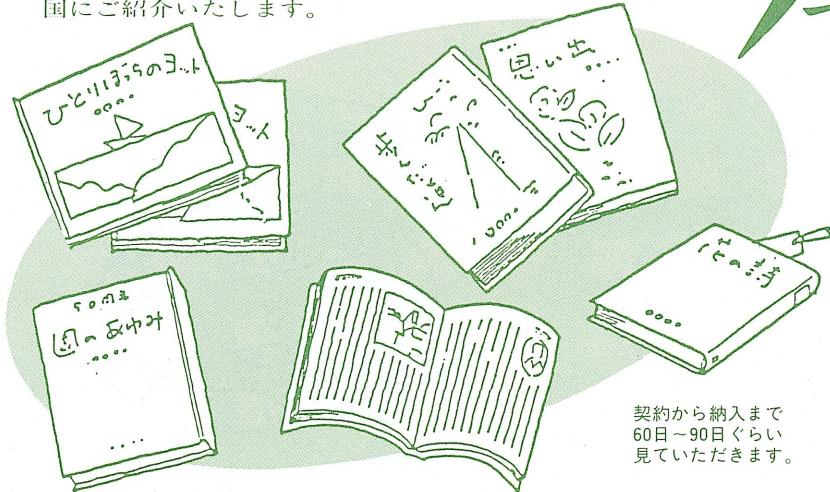


自費出版のご案内

手間のかかる作業は、お手伝いいたします。

●内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。●お気軽にご相談ください。

●完成したご本については、小社の宣伝ルートを通して全国にご紹介いたします。



契約から納入まで
60日～90日ぐらい
見ていただきます。

記念の
本

づくりを、なさいませんか。

- * 1. 本の内容は 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、隨想集、作品集など、ご随意に。
- * 2. 製作部数は 1,000部以上がお得です。
- * 3. 製作期間は 原稿原載から完成まで、約3か月見てください。
- * 4. 本の大きさや体積は……大きさはB5判、B5判、A5判など。製本は、
- * 上製本から並製本カバーフきまで各種あります。好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。
- * 5. 本文は 原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。
- * 6. 絵や写真は もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。

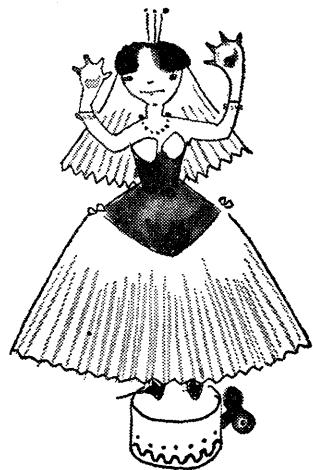
子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

記念の本づくり係 TEL 03-292-7788
〒101 東京都千代田区神田小川町3-1

(ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ)

幼児の教育



第八十六巻 第四号

幼児の教育目次

—第八十六巻 第四号—

「幼稚園真諦」を読む

——「幼稚園教育の在り方について」と対応させて……津守 真…(4)

SF的読み解き 子どもという風景

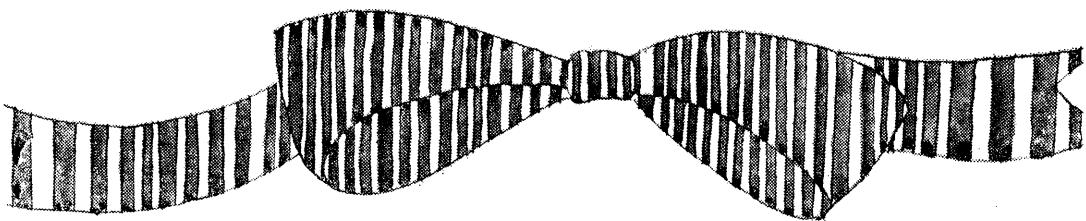
第一十四回 待っている姿勢…………堀内 守…(14)

兎園隨筆

出会い (その四)

鷹木 寿江…(24)

© 1987
日本幼稚園協会



私の見た中国 子どもたち……………近藤伊津子…(30)

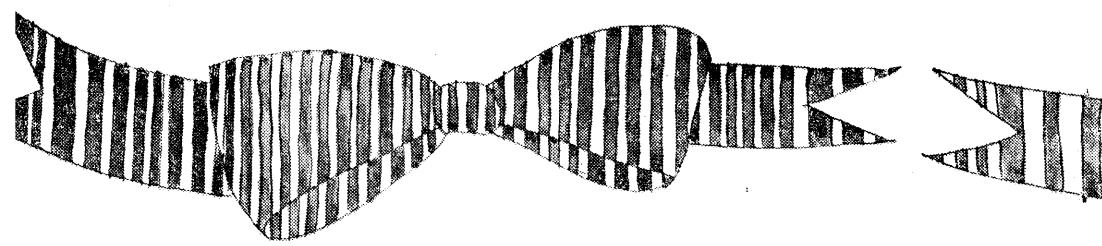
再び 保育の中の小さなこと、大切な」と(4)……………守永 英子…(45)

「塔の小公子」たや

——シェイクスピアと絵画——……………村上 健…(55)

若いお母さんたちへ 帰国して三度目の春に……はるにれの会 塚田 幸子…(55)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 育子
土屋真美子



「幼稚園真諦」を読む

——「幼稚園教育の在り方にについて」と対応させて——

津 守 真

これは、昨年十二月二十一日に、東京都私立幼稚園協会で行った講演を書き直したものです。

はじめに

「幼稚園真諦」^{*1}は、昭和8年に東京女子高等師範学校の夏期講習会でなされた倉橋惣三の講演で、翌昭和9年に「幼稚園保育法真諦」として出版されました。戦後、昭和28年に復

刊されました。東山魁夷の絵を表紙にした小さな美しい本です。初版には誘導保育の実際例が付いていますが、復刊ではその部分は省かれています。

今回、私は、昨年9月に文部省より出された報告書「幼稚園教育の在り方について」^{*2}と対応させて、「幼稚園真諦」を読むという課題を与えられて嬉しく思っています。この両者はその成立において全く関係のないものです。前者は半世紀以上前に書かれた倉橋惣三の書物であり、後者は、幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議という公的機関で大勢の委員の協議によつて作られた報告書です。ただ、いずれも、幼児教育とは何かという根本問題を問うている点で共通です。今回、私は、私自身の独断的な読み方で、両者を対応させてみたいと思います。

「幼稚園真諦」が刊行されたのは、すでに述べたように、昭和9年であり、現代までの間に、第二次世界大戦と敗戦という大きな社会的転換期をはさんでいます。戦後昭和23年に「保育要領」が、昭和31年には「幼稚園教育要領」が刊行され、その間、昭和30年に倉橋惣三は死去されました。その後幼稚園は急激に増大し、高度成長期の幼児教育の時代を迎え、昭和39年には幼稚園教育要領が改訂され、そして現代、高度技術化の時代、幼児減少の時期となっています。このように幾多の社会変化を間にさしはさみ、この書物は、現代といいかにかかるのでありますか。

私は、この書物と現代との橋渡しをするものとして、昭和22年「幼児の教育」^{*3}第64巻5号より掲載された、倉橋惣三による「学校教育法における幼稚園」という文章を中間にい

れて、現代につなげたいと思ひます。倉橋惣三は、戦後直後、昭和21年に発足した教育刷新委員会の委員として、教育基本法、学校教育法の制定に尽力されました。この委員会は安倍能成を委員長とし、南原繁、小宮豊隆、城戸幡太郎、森戸辰男等々を委員として、戦後の新しい日本の教育の根本問題を議した重要な機関です。多くの有名人が名を連ねているというだけではなく、これらの人々が敗戦という日本人に共通の未曾有の体験を基として、日本の復興のために、教育の原点に立ちもどつて考えようとする、尋常ではない真剣なエネルギーが注がれたと察せられる特別な委員会と私は考えます。教育基本法および学校教育法の誕生したばかりのときの、この倉橋惣三の解説は、全体をつくしたものではなく、幼児教育の観点から重点的にとり上げたのですが、いまこれを読み直すとき戦後四十年を経た間に私共の間から失われかけている教育の原点に対する思考を思い起させてくれるよう思います。

今回、文部省から報告された「幼稚園教育の在り方について」は昭和六十年の現代において将来を望み見つづ、幼稚園教育の基本となる事柄について、「共通理解が得られる」点は何であるかを課題としています。それぞれの委員なりに、幼児教育の原点に向つて考えようとしたときに、このような表現で文章化されたと考えてよいでしょう。

いうまでもなく、この三者は相互に独立していますが、原点にもどつて考え方とする精神において、三者には共通なものがある。そこで私は、私個人の考えに立つて、この三つを並べ、「幼稚園真諦」を読んでみたいと思います。

初版の序に、倉橋惣三は、眞諦という題名はおこがましすぎる「僭称」ではないかと反省し、本当の幼児教育はこれだと断定はできない、ただ「自分としては」これ以上動かないという考えに達したのだと述べています。著者は幼稚園に久しく身をおいて、「疑惑と探究と、又いつも附きまと遙躅とを経て、やつとここに落ちついた考え方」だと言います。これは、保育の実際を知る人のことばだと思います、毎年、毎日、子どもにふれるごとに違った毎日であり、保育する人は、毎日新たなことに出会って、自分として考え方直さなければなりません。何か絶対的な規準があつて、それに従つてやればよいというような、そういうものではありません。ところが、日日に違う毎日を貫いて、変わらないものがあります。前者は保育の目に見える部分であり、後者は、保育者の心の中につけて、外からは見えない部分です。いつも保育者の中で温められ考えつけられているものがある、それが日日の子どもにふれて具体的に動き出すのです。それが何であるかといふと、ことばでこれと云い切ることはむつかしい。愛と云つても、眞実と云つても、そうには違ひないが、抽象的すぎて、すぐには生きてはたらかない。日日の保育の実際の中で、疑いつつ、探究し、ためらいつつ次第に落ち着いた考え方をもつに至る、子どもを育てる人の、自分自身の形成と修練にかかることです。自分とは違った子どもと一緒に生きる生活を形成するのにふさわしく、自分自身が成長しつつ、作られてゆく考え方です。「幼児教育の在り方」の中で、しばしば言及される「創意工夫」というのはこのことだと私は考えます。

次に、私は、I 幼稚園教育の基本についての共通理解、II 教育内容の二つに大別して、それぞれの問題について述べようと思います。Iについては、1 教育における目的と対象 2 幼児の生活 3 保育者（教師）の役割と生活 4 保育の過程と結果 II については、1 健康で幸福な生活の体験 2 自己の確立から他者と共同の生活の体験へ 3 自然との直接体験と分けて述べます。

I 幼稚園の基本についての共通理解

1 教育における目的と対象

日日の保育の実践において、教育の目的あるいは目標を明確にして、たえずそれを頭において子どもを引張ってゆくのが教育であるという考え方が、世の中には根深くあります。それに対して、子どもを一方的に引張ってゆくのではなく、子どもに合わせて生活を作つてゆくことを考えるのが日日の実践であると、保育の実践家は多かれ少なかれそのように考えるでしょう。「幼稚園真諦」は、第一篇「幼稚園保育法」の冒頭からそのことを問題にして次のように述べます。

「教育ということの考え方の上に於ても、ひたすら目的を本拠として教育に臨んで行くか、対象の特質に基いて教育に臨んで行くかという教育態度の差違によつて、相違が起つて來るのであります。……つまり、目的へ対象をはめていくか、対象へ目的を現わしていく

くが、その態度の別によって大きな相違が起つて来るのです。」「これは必ずしも教育ばかりでなく、人と人との間にいつでもある二つの態度の別で、何ごとでも、自分の意見をもとにして他に持ちかけていく人もあるし、全然とまでないとしても、「己」を後にして先づ相手を生かしていくとする人もある。」と更につけ加えられます。

この二つの態度の違いは、「幼稚園眞諦」を一貫しているテーマともいえると思ひます。くり返し、このテーマがあらわれます。教育熱心という場合にも、教育目的に熱心な人と、対象である相手を尊重することをまず考える人があることが指摘されます。前者の場合には、子どもを良くするという大義名分があつても、おとなが子どもを支配することになりがちです。後者は、自分のことは後まわしにして、徐ろに、慎しやかに、相手を生かそうとする。年齢のことを考えたときにも、幼いほど、目的の方へ引張つてこなければならぬと考へる人が多いが、それは全く逆ではないか、と著者は主張し、「相手が幼ければ幼い程、対象の方へこっちはら手を伸べていくのでなければならないのですますいか。」とのべます。目的と対象という二つの極の間を、疑い、揺れ動きながら、保育の実践においては、対象の特質に基いて教育に臨むということに落着いてゆきます。そして「以上、幼稚園の保育は、教育の色々の種類の中でも、特に対象本位に、実に対象本位に、計画されていくべきものである。」と結ばれます。

このことは、幼稚園教育の目的を軽視するわけではありません。「幼稚園教育には、幼稚園教育としての、厳かな重大な目的があります。それをわれわれは一刻も失わない。」と

も述べられる。その厳かな目的とは何かということは、教育基本法を解説した、「学校教育法における幼稚園」の中で、一層明らかにされてゆきます。

教育基本法の第一条には「第一条（教育の目的） 教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として……」と教育の目的を明瞭に述べています。この中で、「人格の完成をめざし」という点について、倉橋惣三は詳しく論じ、次のように述べます。「多くの人格論は、人格の完成したところに就いて。つまり出来上った人格である。しかし出来上った上のことばかりでなく、今がもつ可能性に立脚して云う意味では、出来上った人格の形よりも、その構成要素が大切である。出来上った形で云う時は『格』と云う字が大切な意味をもつ。しかしだんだん出来て行くであろうという今では『人』と云う字が根本である。」

ここでいう「人格の完成」とは何か、といふと、すべての人に共通する、でき上った形としての人格ではなく、それぞれの人に、それぞれの完成があるという考え方从根本上あると思います。ある規準に照して完全と云える人格はだれにもありうるものではない。むしろ、私共めいめいが、一生涯かかつて成就する、それぞれに応じての完成です。そのような意味では、だれにでも人格の完成があります。幼児教育が目的とするところは、このよううに大きな目で見通したときの、それぞれの子どもの人格の完成への最初の部分と云つてよいでしょう。

更に、ここでは、「今がもつ可能性」が強調されています。すなわち、完成とは最終段階のことだけをいうのではなく、そこに至るどの時点の今をとっても、それが完成への可能性をはらんでいる。どの時期にもそれなりの成熟があると云つてもよいでしょう。赤ん坊は能力は未熟かもしれないけれども、赤ん坊なりの成熟がある。それに対し、ある能力がいかに進んでいても、その子どもが、不完全燃焼のような状態で不満のうちに日を過していたら、その時期としての成熟をしていないと云えるでしょう。それぞれの時期に完成に向う一歩があるのであって、そこを見過したら、将来の完成も覺つかなくなる。幼児期という「今」では、人格のうち、未だ形にならない『人』の充実がたいせつなのだと倉橋は強調します。そして更に次のことを付け加えます。

「私達の幼稚園では、この四月新たに幼児を受取つたが『人格』としてちゃんとしたのは一人もいない。しかし格こそ出来ないが『人間』であることは實にいきいきと充分に感じた。元来幼稚園での私達の楽しみは、生の人間性に基づかることである。それを人間性と云おう。……人間性は實に溢れこぼれるほど豊かであり、形をなさないで漂いみなぎっている。この人間性にこそ将来の人格が今から目ざされる。そうしてこの人間性の発展にこそ人格が期待されるのである。」と。

私共が心を開いて幼児に接したときには、だれにでも体験される、溢れこぼれるほどにいきいきとした生の人間性が幼児期の人間そのもので、この人間性が發展して人格になってゆくのであることが述べられています。それぞれの子どものうちにある、このいきいき

とした生命性に着目し、尊重しなかつたら、幼児期の教育は考えられません。

さて、ここで、「幼稚園真諦」に述べられた目的と対象についてもう一度ふり返ってみましょう。その場合の目的を本拠として教育に臨むとは実践において、子どもをよく見ないでおとなの大頭にある期待像、すなわち形を先にする態度と云えるでしょう。対象の特質に基いて教育に臨むというのは、形にはまる以前のいきいきとした人間性そのものを尊重する態度です。そしてこの後者は、人格の完成を目指すという、教育の一番大きな目的を、幼児期におろしたものにはかなりません。

「幼稚園教育の在り方について」の中で、「IV 改善の視点、1 幼稚園では、何を意図して、どのように教育が行われるのか」ということが理解しやすいものとなるように、幼稚園教育の基本となる次のような事柄について共通理解が得られるよう具体的な手がかりを示す必要がある。」として四項目があげられています。その第一は、「(1) 幼稚園教育は幼児の主体的な生活を中心に行開されるものであること」とされています。

すなわち、幼稚園は、幼児が生きる場であることです。これから一生涯かかって自らの人生を完うしてゆくその第一歩を生きる場所が幼稚園であって、それぞれの子どもにその可能性を開くのが幼児教育であると云つてよいのだと私は考えます。

最初に述べたように、これは大勢の人の合議によって作られた報告書ですから、それぞれの人によつて違つた解説がなざれるでしょう。私は、幼児の主体的な生活を中心にしてい

うことは、教師の期待する目的に子どもをはめていくのではなく、「幼稚園真諦」で主張されている、「対象（子ども）へ目的を現わしていく」という態度につなげて考えることができます。人格の完成という教育の目的は、幼児の主体的な生活を尊重してはじめて実現されるものであります。

(つづく)

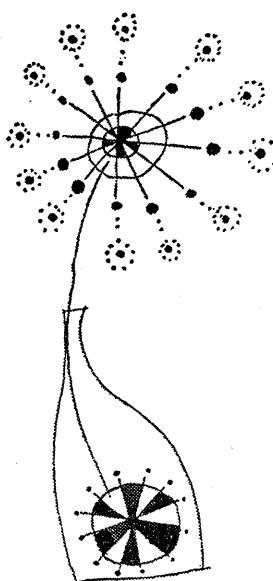
* 1 倉橋惣三「幼稚園真諦」倉橋惣三選集第一巻 フレーベル館

* 2 文部省「幼稚園教育の在り方について」昭61

* 3 倉橋惣三「学校教育法における幼稚園」幼児の教育 第64巻5号18頁 昭22

(愛育養護学校)

第一十四回 待つている姿勢



「待つて ェー」と叫ぶ子

全身を屈伸させ、頭を前方に投げるよう

叫んでいる。

再び背筋を伸ばし、あたりの空気を胸いっぱいに吸い込み、目を大きく見開き、

「待つてたら、待て ェー」と腕を振り、じだんだを踏

み、睡を吐き、涙をぬぐう。

追はるる者の姿は見えず、

幼な子のまわりの空気は重く、

何事ならんと窓からのぞく大人たちも
幼な子が天に突き出す掌を見て、
“事件”ならぬ、茶飯時と判断してか、
声もかけずに見えずなりぬ。

当の子も、泣き疲れ、

頬を伝ひし涙のしづくが口に入る頃、
涙の塩辛きことにあらためて気づき、

あらためて涙を舐め、などして、

わが身こそ異世界への通路なることを垣間見る。

「」ころはあらぬ方に浮遊し出している。

待つこと。

異世界のことば——榤。待合。待針。待ち肥。待ち巻
み。待ち侘び。待ち遠し。

幼な子の身近なことば——待ち受け。待ち伏せ。待ち
ぼうけ。

町街の松の木、町筋の待合室。

待ち構える時の、身体には全エネルギーが移動し、緊
迫の度を高めるから。

見かけの上では何をしていなくとも、

全神経は臨戦体制に入る。

いっしょに連れていつてもらえなかつたあの子は、
いまはぼんやりと立つてゐるが、
それは臨戦体制が緩和され、全身から力が抜け、惚
け、やるせなきとき。

「だれかがきっと待つている」とは『ひょいこりひょう
たん島』のテーマソング。「待ちましょ、待ちましょ」「
あなたを待てば」「待ちぼうけ、待ちぼうけ」。

待つとは、ふしぎなこと。機会を待つ。電車を待つ。
バスを待つ。期限を伸ばす。いや、待遇する。期待す
る。俟つ。

待ち焦がれ、待ち侘び、待ち明かし、待ち兼ね——
「エー、お待ち遠さまア」「お待たせ致しました。間も
なく列車が入つて参ります」「待ちなさい」「待つてちょ
うだい」「お待ちなさい。」

よく聞くのは「待ち」を幾重にもくるみ、洗練させ、
さながらすべてを包み込む大きな趨勢だろう。

子どもの耳にも「お待ち遠さまア」は、威勢よく響
く。商業ベースのことばであることは、人の顔色を読む
のに似て、「お待ち遠」から「ハイ、お待ち」に至るま
で、区区のニュアンスを発信する。

「待つ」ことは、先行経験なしにはできない。またで
きない相談だ。犬は待つ。「おあづけ」のように。だが、
それも、あとの中を期待してのことである。ヒトだけが
機会や意味を待っている。

駅の「待合室」、病院の「待合室」。駅の伝言板を見
よ。

「夕方、30分待った。先へ行つてゐるぞ。キムラ」「例の
ところにいる。あまり待たすなよ。K」「お待ちしてい
ました。お見えにならないので、さびしく帰ります。ケ
イコ」「41分も待つた!! もう待てぬ。タバコが切れた
から買ひに行つてくる。帰つたのじやない証拠に。火星
人」

などと、しおらしきものより、ナニみのあるものまで

連々と続く。

「お若えの、お待ちなせえ」

「待て、とおどめなされしは、拙者のことぢやあるか
な」

様式化されたドラマの「待ち」は、かららず反復があ
る。テレビドラマなら、

「おい、待て」

「おれのことかい」

ぐらいで、あっさり済んでしまうところを
延々と、大げさなしぐさで演る。

「待て。待たぬか。待たぬと擊つぞ」

「ふん。そんなやせ腕で撃てるものか。撃てるものなら
撃つてみる」

「待て、御用だ御用だ」

「まあ、待ちなさい」

「やうと待つてくれ」

「やよい待ち」

「まあ、まあ、待ちなさい」

「お待ちよ」

「もう待てぬ」

様々の待ち。「待ち」はどこにも存在する。

「ねえ、お話ししい」

「皆さん、きょうは待ちに待った運動会です……」

「うるさいね。見ていいらん。いま忙しい。あとでしてやるから、待ってなさい」

「昔、むかし、あるといろに……（これだって「待ち」なのだ）

「それでどうなつたの？」（待ちきれずに急かせる）

「…とれ。おしまこ」

「ねえ、ねえ、もう一つおはなし、して」

「ここに見られる一連の「待ち」は、明らかに内的行動。黙つて聴いているという状態を示すのみでなく、心もからだも浮き浮き、びくびく、どきどき。イメージが湧出し、盛りあがり、手に汗をにぎり、主人公と一体化して、身を乗り出し——要するに、再創造しているのだ。

早く芽を出せ柿の種……

もういくつ寝るとお正月……

どこかで春が生まれてる……

一年生になつたら……

「待ちに待つた」

「首を長くして待つた」

「待つ」が昂じると、「首が長くなる」のらしい。「じりじりして待つ」「苛々して待つ」は心象風景だが、「泰然自若」として待つのは姿勢と雰囲気を表わす。待つことは、決して心だけの動きではない。子どもの場合には「待つとも待てぬ」ものがある。「のどがかわいた」「おなかがすいた」「トインにいきたい」。

おとなならば、この「計算」がある。予定に入れて、あらかじめ済ませておくことができる。だが、子どもの場合にはこの「予定」や「計算」が時折狂う。
「もう待てない」と表現されたとき、「待ちなさい」と言つても、そのとおりになるとはかぎらない。

待たない。待ちます。待つ。待つ時。待てば。待て。

「た・や・つ・つ・て・て」いや、「待とう」を加えて

「五段活用」。文法上のこの変化。^{へんげ} いみじくも言いたり。

「活用」とは、この「活用」のまわりにどるどろおぞましき音たてで見え隠れする「待つ」の風景。

「見合って、見合って。『待つた』無し！」

ここでは「待つた」は名詞形。

それは戦略、戦術、駆け引き、偶然。

魔法の国、おとぎの国、童話の世界では「待つ」が基本テーマの一〇。

王子さまの到来を待つ白雪姫、眠り姫。

百年の歳月を昏昏と眠り続ける。それは何かを待つて、はじめて意味のあること。何も生ぜず、ひたすら昏昏と眠るのみならば、死とどこが異なるだらうか。

とにかく待ち。ひたすら待ち。

それは、ある時は根^{ねん}と忍^{しのぶ}と耐^{たまん}とねばりを要する禅^{ぜん}的な

修行のイメージ。名人、達者、達人、悟りの境地。それは、ある時はゲームの場面。「ちょっと、この石待つ

くれよ」「いや待てない」。また、あるときは「いいとこ

いかがくるかも——

ろへ来たと高い背使われる。向うからやってくるのだ。

いつたいチャンスは向うからやつてくるものなのか、こちらが待つべきものなのか。この奇妙な論争は、哲学上の大問題のようでもあり、また子どもの心象風景とも

よく似ていよう。

言語はこの機微を十全に表現し尽せない。

待ちの凝縮。「夢見る」と。

夜の明けるのを、食事の用意ができるのを親の帰りを、小鳥の来るのを、雨が降るのを、誕生日を、客を、犬を……

でも、「夢」だけでは息苦しくなる。「夢」だけでは期待と不安が増幅してしまう。

待ち受ける姿勢がいつのまにか「待つ世界」に変わってしまう。

「待つ」とには胸のうずき、ときめき、痛みがつきものだが、

それは——

きつとくるはず——

これらはその結晶の表象

という二つの期待の間に生まれる矛盾した疼きなしには不可能だ。

「待つ」ことが、

集団内の帰属を意味するならば、

馬鹿正直に待つ。ひたすら待つことは、

「待ち惚け」の歌にあるように

木の根っこにぶつかった兎の現れるのを

待つのに似ている。

「一度あることは三度ある」

だが、ある時代の弁神論のように、

神の救済をひたすら信じ、厖大な文献に仕立てていく

「待ち」の世界観もある。これらの凄しき世界は子どもには、やし当り無縁である。

「待つ」ことが、

水や食物や睡眠や庇護を求めてのことならば、そこに

は「待った無し」の対応が必要になり、その姿勢がしたいにあるイメージの世界に結晶させられていく。

母の手、母の胸、神の御手——

るいはカイシャ——

がアイデンティティを与えてくれよう。

でも、「山のあなた」（山のかなた）に

幸せを求めて

訪め行くと

なおも、その先の

「山のあなた」が示される。

「あなた」「あなたのあなた」「あなたのあなたのあなた」……

た

反対に

『青い鳥』のチルチルとミチルのように、

放浪のあげく

「青い鳥」が家にいたのを発見したとしたら、

あの放浪の旅は徒労だったのか。

徒労だったとしたら、

初めから何もやらなかつたのと同じか。

徒労ではなく、過程が意味をもつ——と言い切るのもむずかしい。

なぜって——

こんな風景もあるからだ。

それは子どもの目にも見えている。

「まあ、いっぱいやりたまえ」

「じゃ、わが○○のために、乾杯！」

この○○には任意の名前が入る。
たとえ気に入つていないう○○であつても、

「わが○○のために！」

という場面においてならば、名声、表彰、地位、受

容、注目、評判、理解等々から、自信、能力、熟練、達成、自立等にいたる文脈が凝縮しているはず。

これらは抽象的なものではない。

子どもの欲求、潜在的欲求、のなかには恐ろしく生まれま
さましい形で生きている。

真・善・美・聖という

ドイツ哲学風のガイネンをつき抜けてみよ
子どものライフ・スタイルは、

「待つ」ことにおいて

ぐんぐんと変わり出し、

名声、評判、受容、注目、理解、熟練、達成等々にお
いて

神経質になつた。

現代のコミックのシャワーのなかで育つた子どもたちは、

字で音を書く。臨場感を出す。

ボールがバットに当たつた瞬間の音は、

「ダーッ」か「キューン」

ボールが落ちる音は

「グシャー」か「ボトッ」「シュボツ」「スクツ」

体感的な表現も増加している。

オートバイの走る音——

ズドドドド ブォーン、オン、バオン、ギャアアン

走る音——

ズン ドドド ダダダダ、しゃかしゃか

太陽の光にも音がある。

ちちち ゆん ゆん

多彩なのが笑い——

うひょひょひょ きやははは ずほほほ ぬひひひひ
カカカ

現実の方がマンガに近づいて

時折 「きやははは」と笑っている子に出会う。

こうしてみると、

「待つ」ことにおいて

「じっとガマンの子」も少なくなり、

(というより、一つのことにこだわらなくなつて、次々と移り変わることになつたのだ)

多様で、多彩な表象のジャングルを

スイスイと身軽にとびまわつて、

「おーい、待つてろよ、いま行くからな」

とばかりに、こつちから出かけていく
ようになつたのでは。

無垢で、無邪氣で、という神話が

霞みはじめたのと時を同じくして

子どもたちは身体感覚を取り戻した。

「はい、こちらを見なさい。口を閉じなさい。静かにしないさい」とは、一斉教授成立以降の学校の中では必然的に発せざるをえない注意だった。つまり、いまはここに集中せよ。その他のことは「待て」という制度が動きはじめたからだ。

ここにおいては、すべてが直線的に一斉に進む。列を

乱すな。順序を守れ。一点に集中せよ。

これではからだがたまらない。からだは、静座、静肅、沈黙に耐えられず、もぞもぞ、じわじわ、むずむずと動き出し、子どもの心の中でたえずほかのことへ関心

を向けるよう誘なつた。

子どもの日常感覚は「」でボール投げをしてはいけ

ない」という立て札から、別のメッセージを読みとる。

文字どおりのメッセージは、禁止である。その先には

「危険」というメッセージがあるかもしれない。だが、

子どもは「」から「あわどうが、これほどよく子どもたちが遊んだ」というメッセージを読みとる。

「待つか」「待たぬか」

という二分法は乗り越えられてしまふ。

」のあたりから

侵犯のときめき

に吸引されていく。

進められたことをやるのは当たり前

禁止の程度（絶対不可、不可、できればやらぬ方がよい）を読みとり、「侵犯」の疼きとともにを味わう。

実は日本文化も、

ある時から右の原理で動きはじめ、
今日、見え見えになつたように、

トモロウでも

イエスタディでも

なく、

「」の田、」の時」をヨンシヨイしはじめた。

only for yesterday (ただ昨日のために)

から

only for tomorrow (ただ明日のために)

至るまで疼きが消え、根が消え、

根なし草よろしく

軽やかになった。

浮き足立つてきだ。

酔つ払つてきた。

新型の産業が成立し、何から何までも産業に仕立てて

しまつた。

子どもをいれを受容しているように見える。

ところが――

驚くべきことに、

あれほど大量の情報のシャワーを浴び続けた子どもたちが、

その大半をケロリと忘れるということも

明白になってきたのだ。

たとえば、大学生――

「仮面ライダー」一族からウルトラマン一族を通り、泳げたいやきくんを歌い、日本中にたいやきやさんをはびこらせたこの世代は、

いま――

泳げたいやきくん

をうたえる者がわずかなのだ。

あのメロディ、あの歌詞のなかにひそむ

ニヒルな味、ペース、ユーモア

を歌うこともできない。

似たこともたくさんあって――

その時その時の情報内容が記録に残る

のではなく、

反応の体験が少しずつ集積して、
ある反応タイプを形づくる
ように見える、

あ・さ・い・き・泣・き・わ・め・い・て・いた・子・は・

路上で他の子とチャンバラなどをはじめ、
相手に斬られたと見え、大声で「ズテ」と言い、「ド
ワッシャーン」と倒れた。

さて、どうするか、見て、待つていよう。

(名古屋大学)

出 会 い（その四）

——シベール——

蕪木寿江



『皆さんは「シベールの日曜日」という映画を知っていますか。シベールというものは木の精で、フランスとかスペインとかラテンの文化の国の伝説なんですよ。あそこにでてくる男の人は、フランスとベトナムが戦争しているところに、飛行機乗りで農村を爆撃して記憶喪失症になつてフランスに帰るのですが、奥さんはきれいな人ですね、女としてやれるあらゆる誠意をつくしても、あの男の人には駄

目なんですよ。修道院にいる捨て子の女の子（シベール）と出会つてから變つてくるんですよ。その女の子といふと気持がなごやかになつて、神經の病気が治つてくるわけですよ。

ヨーロッパの人達には非常にそういう気持が強いんですよね。木の精みたいな自然がなくなつちやうと人間の神經がこわれちやう。日本はシベールなしでしょ。自然など全然

なくてデパートなんかで飲んだり食つたりばかりして、神経が変になつてしまふ筈ですよ。

結局二人はクリスマスの夜、山の中で火を燃していると、男の人は警察につかまつてシペールも両方とも死んでしまうのですけれども、世間というものは、そういうもんですよね。あの男にとってシペールと出つくわしたこととは象徴的にいっているのですが、大自然の精というものに出会つたことによつて神経が正常にもどるわけね。この世間的なものに慰められようとも、破壊された神経はなおらないんですね。

ぼくはシペールっていうわけにはいかないけれど、ブッシュ孝子からみれば、ぼくはシペールと共通するものを感じたのでしょうか。大学を定年でやめてなぜぼくは畑なんかやつているのかと思つたね。畑の作物の出来

が悪いと僕の神経も具合が悪くなつちやう。

長雨が続くと地面が冷たくなつて空気が入らなくなつてしまふ。大地といふものは温度を

もつてゐる。冬でもあつたかい、母親と非常に似ていますね。ただの土じやあないんですけど。

うまく肥料が入つていて水も流れている

土の中、根が何と出会つて、作物の色と健康さでわかる。日本人がこれだけ自然を汚しちゃつた時代はないんですね。農薬も

その原因ですね。昔の農民と違つて市場からお金でせめられれば、いやでもおうでも金目

のものをつくつて競争して売らなければならない。作物を愛して、暇も対話している暇

もない。日本人にとつて自然は神様ですよ

ね。神様は人間がどんなに利口であるといつても、人間の角でへし曲げられたままでいるわけはない、自然は人間より強いんだ。自然是苦しんでゐるに違ひない。自然はいつか復



讐するだろう。ぼくが烟をやつているのは、わずかの土地といえども自然をながめたい、自然が人間の欲の下で押しつぶされ穢れたままでいる筈がない。雨が降つても傘をもつて眺めています』(五十四年十月の講演会より)

偶然にも「シベールの日曜日」の映画をテ

レビで見て共感していた私は、その偶然に驚

いた。早寝早起きの習慣で滅多に夜のテレビは見ないので、シベールの可憐な可愛さに魅かれていったのか、身をのりだして夢中で見ていた。周郷先生のようにこんなに深く考えずにいたが、男の人が盗ってきたクリスマスツリーに灯をともしているとき警官が走ってきて銃声がとどろいた。と、The end の文字が森の中から迫ってきた。シベールは「木の精」であったのかとお話を伺つて納得した。先生もシベールであつたような気がする。木の写生をなさるのがお好きで、スケッチブッ

クにそれぞれ語りかけてくるような木が描かれてある。東京にお住いの時は、小石川の植物園や外苑に行かれたとか。よく出合う散策のおばさんに、「あなたは木の精ですか」と、『言われたと聞いたことがある。

木

木は十字架です

地は根ざし

天を求め

重力に逆さがむつて

伸びあがる

——ぼくは

また

冬枯れの

春を待つ

木を描きたいと

それを求めて

歩きまわる

空にひろがる

雪雲のなかの

太陽は

まぶしくて……

『そのころ——そうして今も——私は、あの木を描いてみたいという一念に駆られてスケ

ッチをして歩いた。もちろん、そうやすやすとは描けない。が、私は冬から春にかけてまだ茅を出さない木たちが枝をのばしてしまり、また夕方の風や寒さに耐えて、いるのを見るのが好きだった。そう、木と「同一化」をやつて（まさに、シベールではないか）自分の分身のようなそういう木をさがして林の中を歩きまわった。林のなかでなくとも、街のなかでもよかつた。石川啄木の「今の世のなかには山の奥の巨木のような人間がいなくな

つた」という考え方があったのかも知れない。街のなかでも、天に向って伸び、枝を張った自然のままな木のおもかげのある木をみつけて、それをよく仰いでながめた。「みんな何を見ているのかね……が、ぼくのよう

に木ばかり見ている人はいないだろうね」友人と街を歩いて、ふとそんなことをいったものでした。』

山の手入れをしなくなつた森を歩いては、葛の太い蔓でぐるぐるまきになつて頭を垂れている杉や桧の木を、鎌を持って蔓を取り戻され、木々が空に向つて自然の姿を取り戻すのをほつとして眺められた。夏は木の下草を刈つたり、冬枯れになると麻袋を背負つてみぐるしくなつた落葉搔きに、何度も何度もいらっしゃるなど、常に先生の心を心として手になり足になつっていた奥様と一緒に、又は一人で、手首が痛くて原稿が書けない日もあり

つたが、そうせずにはいられない程、木の生命が大切であった。又、川が汚れているのを憂い、濁んでいるごみを、教会の人や訪ねて

んて沢山枝をつつ込むと駄目だよ」と言われた。

くる若者の先頭になつて取り除き、気持よく流れる川に戻していった。『「山をきれいにしましょう」「自然を愛しましょう」などといふ

樹の心を思い
草の心をしのび

スローガンは、あれは山が瀕死の重症だ、と

春来る前の
冬の林の

と共存していく、当然のことを叫んでいると

風の中に

いつているのと同じなんですよ、人間は自然

ひとり佇みたなづ

いうことはどういうことなのでしょう』と、

よく話された。林の中で、石でかまどをつく

り、たき木を集めて飯盒でごはんを炊いた

わが心の不思議さに
ふと涙ぐむ

り、先生の烟でできたたまねぎのお味噌汁を

いすこにか

つくつたりして、ガサゴソという落葉の上

川の流れる音がして
春近しと

と語りながら食べた。煙にむせんでいると、

「火を燃すことも知らないのかね」と言って

教えて下さった。「何でも、早くしよう、な

告げ知らせ



風未だ寒く
この林に
日のかぎり

ただうつくし

「人間に会いたくない」とおっしゃりながら、最も人間を愛した先生のように思えてならない。

*ブッシュ孝子

樹木のよう
私は一人でいたい
人間に会いたくない
山の木のよう
聳える山のよう
人が来るのを
避けている
私は
人のわざわいで枯れてゆくのを
おそれて いる木のよう……
木といっしょに
亡びていくのを知っている木なのだろうか

お茶の水女子大学家政学部児童科を卒業後、大学院生として三年間ドイツ留学（自閉症の子どもの治療）。ヨハネスと婚約、日本に帰り、乳ガンの宣告をうけ、先の困難を知りながら結婚。一九七四年一月、二十八歳で逝去す。七三年九月からほとばしるよう に詩を書きはじめ、一ヶ月で八十篇を越える。「白い木馬」として先生が編集、サンリオより七四年八月出版

—私の見た中国—

子どもたち

近藤伊津子



—95.10.23

昨秋・中国大陸の旅をした。何よりも中国の子どもたちにたくさん触れたいものと願いながら、夜の北京空港におりたった。

最近の中国では、一夫婦一子の政策がかなり徹底され都市部に住む人々は殆ど一子であるという。

地球上の全人類の四分の一を占めるという中国の人口の膨脹を抑制していくことは、この国において重大な課題であるのだ。

それが実行されて数年経ち、その一期生の子どもたち

が学齢を今年迎えるという。

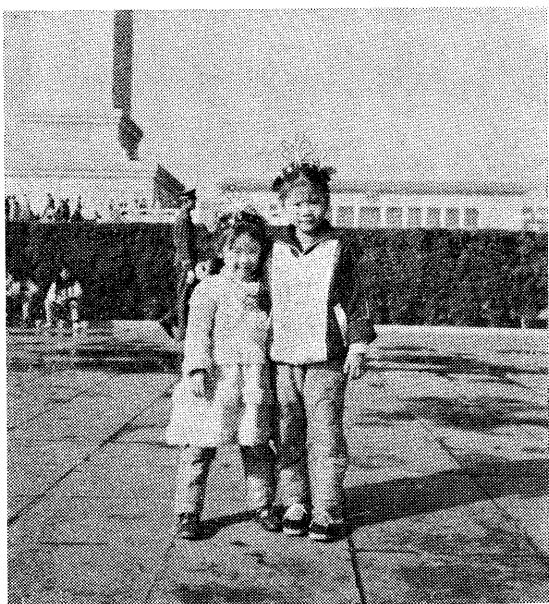
日本で報道されるこの事実は、私の中にある中国の文化としての子どものありようが、イメージしがたく、もどかしく思われた。

しかし、今回の旅は、この私の思いを探らせてくれるものではなさそうであることは、予想された。風物を見る凡庸な赤ゲットの一人にすぎないものであるから。

到着翌日の北京の天安門広場は、前日の雨の小降りで、足元の敷石が湿っていたが、音がどこまでも響きわたりような透明感のある秋天であった。南北800m、東西500mもあるこの広場は、おびただしい数の老若男女が潮流が幾通りも同時にまきおこっているように動き、壮観である。

その一方、のびやかに散策する人々もいた。幼い子をつれた父・母、又は祖父母と思われる人々。

日溜りの中に腰をおろした二組の母子づれに声をかけた。五才と三才の女兒はどちらかが誕生日であるという



(写真①)

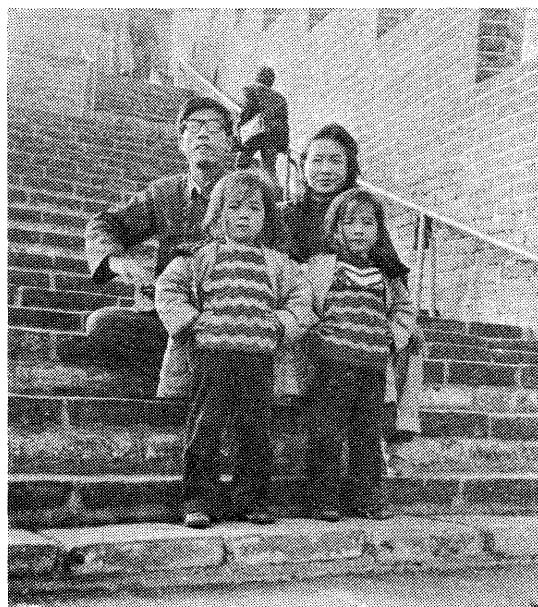
(写真①)。二人とも赤い冠の被りものをしている。冠には剪り紙のような蝶蝶が華やかに飾りつけられ、一見京劇のそれのようだ。綿の入ったスラックスとジャンパ、一人はピンク色の手編み毛糸のワンピースをスラックスの上に着ていた。赤い紐結びのズック靴と赤いビニール靴、これは外出の装いか。この二人は、カメラをむけると、さつとポーズしてくれた。

見わたすと、広場の中ほどには、このような幼い子づれが幾組も、まもなくの極寒の前の陽光を惜しむようになむろしている。

解放軍兵士の軍服を模した服の男児が目立ったが、子ども達の服装は非常にカラフルであり、女児の毛髪にはリボンが飾られていることが多い。

しかし、兄弟、姉妹と思われる子どもを連れた人が、視野に入らないことは、奇妙で、私を不安にした。

北京の北西にある八達嶺の長城に登った。途中、古代の長城の墨壁の残骸が点在しているのを見た。北方民族



(写真②)

匈奴の侵入を防ぐために紀元前の昔から、幾度も修築してきたという。うねうねと続く長壁の階段のはんの触りの部分を歩いて登った。おもしろいことに、階段の一つ一つの高さが不ぞろいなのである。敵を欺くためのものか。その階段を、幾たまりも、この国の人々が家族つれで楽しんでいた。

足元の覚束無い老母の両手をとり腰をかがめて、ゆっくりと登る壯年の息子、この光景は、まさに“中国である”と感じた。職場の仲間とおぼしき紺の人民服の中年の男たちのグループは、壁に背もたれ、悠然としている。若い二人連れ、子づれの一家……皆、実にのどかに、この辺境の少し薄い空氣を吸い込んでいた。

週日のためか、学齢の子どもの姿はなく、幼い子どもたちが目立った。

亜麻色の細い毛髪を肩までたらした女兒二人、緑と黄の波のある横縞のセーターが自慢らしく、ベージュの半コートを両手でかきわけ、腰に手を当て、片方の足は上の階段にのせ、ぴたりと横に並び、父親のカメラに構え

ていた(写真②)。思わず声をかけてしまった。北京から来たという四人家族の父親はしきりと英語で話しかけてきた。時間が全くなく、残念であった。

天安門広場、そしてここでの子どもたちの表情は繊細で明るい。日本の子どもたちにない透明さを感じたのは何故だろうか。親たちの身形は子どもに比べ、質素であるが、その身辺に落着きを漂わせているのを感じた。

北京を離れ洛陽の近くの龍門石仏を見物した折、子どもの姿はなかつたが、七、八才の男児が大仏の前で写真屋に記念写真をとつてもらっていた。長ズボンの裾が片方、ゴム長靴にひつかかり、めくれ上つて、ベルトの代りの赤い紐が上着の下に見えている。頸を引き真剣そのもの、同じく赤ゲットに違いない。うれしくなつて、私も中国人の写真屋に一枚とつてもらつた。丁寧に中国式ポーズをつけてくれた。

洛陽から西安まで八時間余りの汽車旅をした。農村地帯に入ると、山の壁には、黄土高原独特の横穴式住居、

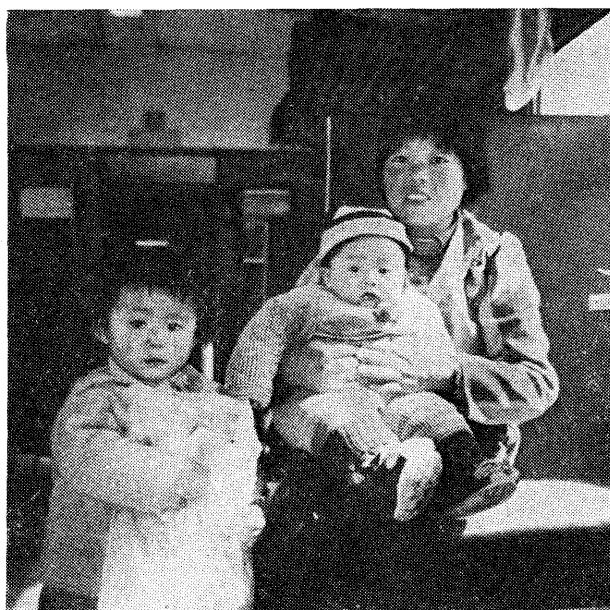
窟洞(ヤメドリ)が見えて来た。乾燥地帯の山西省一帯では、いつとも知れぬ昔から人びとは無数の穴を掘り大地の中でぐらして來た。夏、涼しく、冬は暖いという。中には炕(カッ)（オンドル）があるという。

夥しい玉蜀黍が積まれ、あるいは束ねて木につるされ、唐辛子が連にして軒に干されている。

黄と赤の鮮やかな前庭では、子どもたちの姿が、ちらちらと見えた。広々とした耕地はよく手入れされており、真中あたりが、盛り上って小山となっているのは墓地か。一度は、その小山に白衣、白帽の人々が白布の旗をもつた葬列を見た。

この地の人々は大地に生れ、そこに住み、そして、大地に還っていく。大昔からの営みを、車窓から私は垣間見たわけである。

実は私は、息子から中国の汽車時刻表を土産に頼まれ、北京以来、ガイドに相談してみたが、いずれのガイドも「ない」あるいは、一度駅員にたずねてみてくれ



（写真③）

て「ない」とまことにつけない。この汽車に乗って、すぐ車掌にたずねてみた。やはり「ない」という答えであつたが、暫くして「ある」という。もう一人の担当車掌が業務用の自分の鞄から取り出してくれた。掌にのるほどの小さいものであるが、見れば値段も印刷されていた。それをきっかけに、車掌の詰所になつていてコンパートメントに誘われ、四人の男女の車掌と小一時間も語らつた。

ここで、葬列のこと、炕のこともきかされた。つたない中国語と筆談でも通じ、同じ漢字を持つことがしみじみと有難かつた。

一体にガイドは若く、大学の日本語科を卒業しており、この国では人も羨む職種であると聞いたが、日本語を話すというだけで、ほとんど自國の文化も知らないよう見うけられた。多忙すぎて、學習の時間がないとも嘆いていたが、たずねても「知らない」という返事が多く、情けない思いをした。

それらガイド氏より年嵩の車掌たちの方が自分の生活

を語ることでは秀れ、はるかに興味深くあつた。車窓の景色についても、たずねると知る限り、教えてくれた。

食堂車への往復に硬席の車輛を通つた。文字通り、いかにも硬そうな座席である。いわゆる三等車である。五割方の乗客で、横になつている人もいた。若い母親が赤ん坊を抱き、ピーナツの袋をかかえた二才ほどの男児を連れていた(写真③)。前の席では父親が寝ころび、小声で遊んでいた。斜め前の席に座り、外の景色のスケッチをしているとその子がよつて来て見る。どこからか、チエックの上着をしやれこんだ若者が前にやつて来て、北京から西安に遊びに行くのだと、実に楽しげに話しかけて來た。彼は日本と中国は互に学びあわねばならない、と私の手帳に書いてくれた。もつともなことである。

「可似描您孫子?」と若い母親にたずね、赤ん坊をスケッチさせてもらった。四ヶ月の**トウハラフ**やは、毛糸の帽子、毛糸のつなぎもぎつちりと厚く、足は布で幾重にもくるみ、宝宝布靴(虎を刺繡した赤い幼児布靴)が大きい。父親はいつのまにか隣りの席に移り知らん顔。母親

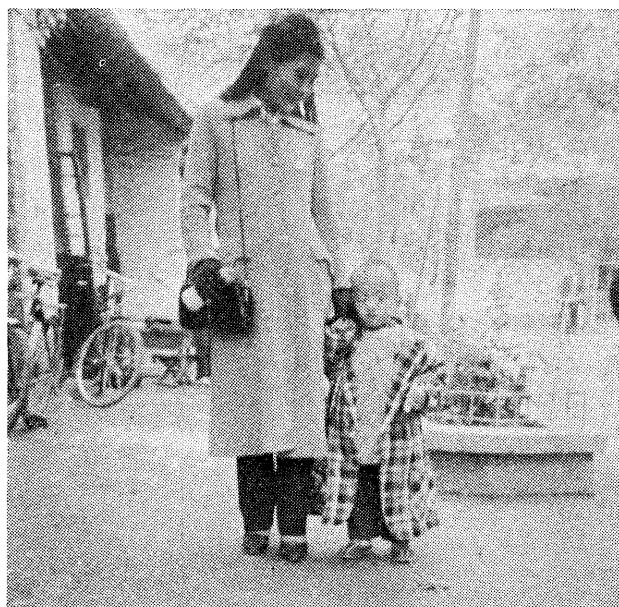
は赤ん坊の衣類のあちこちを直しととのえる。

スケッチの途中、头华坊やが力みはじめた。股間は開けたまゝの衣である。母親は、黒色のハンカチ大のごわごわした綿布の端をとり出し、肛門に当てがい、右手で、それを少しずつ内まきにしている。排泄物をつつみながら、肛門を拭いているのだろうか。

初めて二人の子持ちを発見して、この若い母親なら、まだ何人でも産み育てられるだらうにと勝手に思つてしまつた。農村では、制限があまり利いていないようであると、後日聞いたことであるが。

西安はかつて世界最大の都であった、古都、長安である。シルクロードへの門が城壁の西にある街である。西安駅前は、黒く煤けた軒の低い喰物屋が並び、頭に黒い布を巻きつけた人々がいた。一メートルもありそうな^{ブル}山甲^{マサキ}のぶらさがつている店があった。

翌日、陝西省博物館見学のあと、宿舎にもどる一行と南門で別れ、ひとり夕刻の城内の人々の賑わいの街を歩いた。



(写真④)

中國の街は、いざこも治安が良く、昼夜の一人歩きも、一度も不安を感じさせないところであるが、ほとんどの日本人は出歩かないようだ。

私の前を、やつと歩き始めたような男児に大人の上着を羽織らせ、レインコートにショルダーの母親が、子どもに話しかけながら歩いていた(写真④)。ちょっと先に出て、挨拶して写真をとらせてもらった。人垣の小さな

本屋に寄り表に出ると、又、その母子に出逢った。手を軽くふって別れ、もう一軒の本屋を覗いて出たところで、またもや、再会。母親はさつと私の腕をとり、お茶を飲みに寄りませんか、といって、すぐに路地に折れ込み、まもなく、白の簾のかかる長屋の一軒に着いた。路地は狭く、一・五メートルもあるうか。胡同^{ブリトン}という小路であろうか。入口一ぱいの真白の簾をよけて木の扉を開け入った土間は4畳ほどの居間であった。ゆつたりした肘掛椅子が二つ並び、簡素な机が壁側にあつた。上には小さなカラーテレビと電話器。土壁には小さな模様の紙が貼つてあり、やゝ上方に緑色の小さなランプがつい

た。次の部屋との仕切りには戸がなく、そこは三・四畳位の土間で、大きな寝台がほとんどを占めている。その右手に半間幅の台所、明り窓には白い紙が貼られ、裸電球が一つ下っていた。台所の外側が胡同^{ブリトン}である。台所にはプロパンガスのボンベ、ガスコンロ二つ、それには、薬罐と中華鍋がのつっていた。他には家具らしいものは見当らない。

俊坊やの母親はすぐに湯を沸し、お茶とミカンを勧めて、さつま芋を洗いはじめた。一才四ヶ月の俊坊やは母親にまとわりつく。夫は六時に帰ると言ひながら、夫の写真を見せて、中級法務院に勤めていること、自分は緑のランプを作る工人であることを話してくれた。夕食と一緒にといわれたが、宿舎での約束があり残念ながら辞退した。やがてご主人が帰つて来て、私はまもなく辞去、バス停まで送つてくれるという好意に甘えて、ゆつくり表通りに出た。丁度出たところに、電球屋があり、自分の作ったものであると話してくれた。

かつて長安の都が、全世界の中心をなす花の都であつ

た頃に、こうした城壁に沿つた民家や胡洞は出来上つて

いたであろう。胡洞に密集し連なつた煉瓦と土壁の家々は、思いもかけぬ昔からのものではなかろうか。

李方は、見知らぬ旅人の腕をとり案内した。その心意氣と優雅さは、何に例えられようか。

若い女たちの足の運びの美しさにはとうに気付いていたが、私が客となり、茶を勧められ、改めてその手足の動きの美しさには息を呑む思いであった。

茶を運び椀を差し出す時、その腕を左右にゆるやかにひねり、そつとすべるように出す。そして、夫の周建华に別れを告げ、白い簾の前で写真をとつたが、李方は、私の両手を、そつと取つて立ち、少し俯いている。

私は仄暗い中で、李方の横顔を見ながら、長城での老婆と息子の光景を重ねていた。私は丁度、李方の母親にふさわしい年令である。

今の中の中国の子どもたち、女たちの極く自然な立居振舞の中に、京劇・昆劇の動きと重なるものを、幾度も見た

と思つた。

古典劇の動きは、古来、その国独特的の動きを強調したものではなかろうか。

天安門広場の蝶蝶の冠の少女たち、長城での双生児と思われる少女たちの構え、老母を誘う息子、そして、長安の李方……。

何の街もなく持つて生れた自然の構えであり、飾りつけであり、仕種であり、伝統である。

西安駅前の賑いと違い、ゆつたりと落着きのある私の歩いた南大街は、『かつて都であつた長安』というより、はるかに今も、この西安こそ老成した中国を感じさせるところである。

都であったころ、ここには金髪碧眼の美女が花のかんばせで客を招く酒場もあつたという。

國中の優れた人々が、集まり、散つたであろう。知識階級——優れた感性の詩人たちが、爛熟した文化の中で、しおびよる頽廃の影に気づいたのであるうか。古代の中国の詩人の中ではめずらしく内面的な個人感情をう

たつたものがある。

長安に男児あり

二十にして心已すでに朽ちたり

（李賀「陳商に贈る」より）

の子ども、女たちがいた。

さて、李方に送られ大通りに出ると、西安の街は月が城壁の上まで昇ったところであった。人々は行きかい、夕刻よりはるかに喧噪としている。黄土の砂塵で月はおぼろにかすみ、あたりは羊の焼く煙がにおつた。

満員のバスにしがみつくように乗り込み、宿舎の近くで降りた。

翌日小さな飛行機で西安を後にした。うねうねとのたうつ大河を見ながら、成都に向つた。

成都は、まことに古い都である。街の南に流れる川にかかる錦江橋に佇むと、この国の民話『錦の中の仙女』（注）を彷彿とさせ、その他の民話の登場人物が、歩き、ある

いは話しかけてくるのを感じた。

竹の先に、大蒜を束ね、肩にかついで売り歩いている老人は裾の長い唐衫（注）を着ている。人民服の人々に交わり、西の都であることを告げている。

諸葛孔明、劉備の祀られている武侯祠では、少数民族

の内庭の長椅子で西瓜の種を食みながら、スケッチをはじめると、その中の母子づれが近よつて来て、束ねて垂らしていた私の毛髪を触わり、赤い布と三つ編みにした自分の毛髪を見せた。微笑み返し、西瓜の種の交換。

娘をつれたその母親は、白いシャツの上に毛糸の赤チヨック、藍色の厚い綿入れの大きいスカートを裾長くはいていた。スカートは丹前を後むきに巻きつけたかのように見える。そして、そのスカートの上から、黒色の風呂敷つつみを腰に巻いている。

チベットの方から來たのであろうか。私の話しかけに微笑みだけで、知る縁（注）もない。

連れの女児二人は、自分たちの名前を書いて見せてく

れた。子どもたちはありふれた装いをしていた。

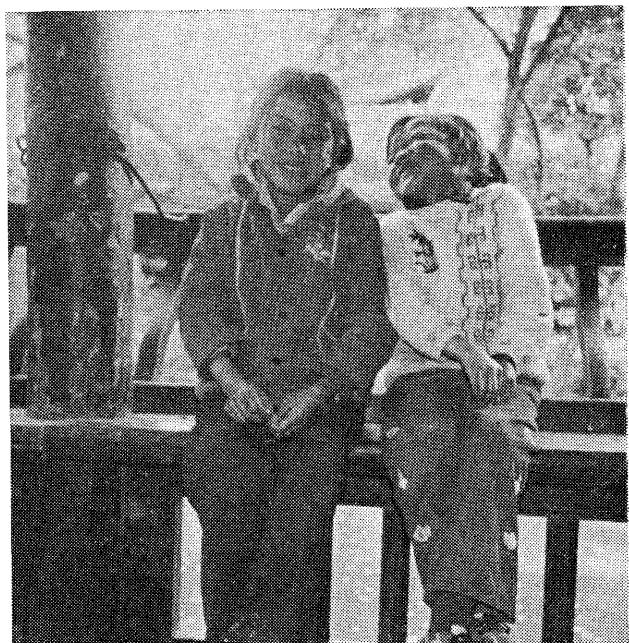
成都の宿舎の近くの自由市場には、貸本屋があり、時
間料金で借りると、その近くにしゃがみ込み、読む。本
には薄茶の厚めの紙が被せてあり、背表紙に墨で書名が
書かれていた。数人の少年が読み耽っていた。

二日目の夜、宿舎を抜け出し、夜店を歩いた。若者に
最も人気のある本を、と求めると『紅樓夢』と『西遊
記』、そして現代作家のものを数冊並べた。

わずかばかりの子どもの絵本を手にとっていると、背
負われるには少し大きい児が、母の背で本をせびつてい
る。母親はその本を手にとり、それでもどした。

『阿里巴巴和四十大盜』(価三角九分)、『聰明的木娃』
(一角四分) いずれも十二、三頁の薄い絵本である。な
おもせびる子どもを宥めながら行つてしまつたが、高い
のだろうか。物の値段は旅人にはわかりにくいくことであ
るが。

上海のデパートの玩具売場で見た買物ぶりは、驚くほ



(写真⑤)

どに慎重であった。丁寧にぜんまいを巻いてみて、動かしてみて、小さなブリキの自動車を買った。

一人だけの子どもに与えるものを、絵本にしろ、玩具にしろ、丁寧に選び、懐と相談する。それは貧しい故といふものでなく、悠長とした性質と、合理性を見たと思つた。

育てている親たちの姿を、そしてその子どもたちを、不安なく觀正在ことに氣付いた。

この後、上海、蘇州をまわり帰国したが、その思いはますます深まった。

嬌女詩（嬌女の詩）

吾が家に嬌女有り

皎皎として頗る白皙なり。

小字を紹素と為い、

口齒自ら清歴なり。

鬢髪は広額を覆い

双耳は連璧に似たり。

明朝梳台を弄して、

黛眉は掃迹に類す。

濃朱を丹唇に衍りて、

黄吻は爛漫として赤し。

嬌語連瑣の若く、

自転車の大群の過ぎたあとは、宿舎の前の広場に、年よりたちが幼児をつけ、ゆつたりと相手をして慈しんでいる。

この朝、私は、中国でのたつた一人の子どもを大切に

急速しては乃ち明懽す。

筆を握っては形管を利とし、
篆刻しては未だ益を期せず。

書を執っては綿素を愛し、
誦習しては獲る所を矜る。

左思

この詩人は西晋時代（二六五～三一六年）の華美を競う形式重視の時代の例外的作風をもつとされている。この詩は俗語をふんだんに用い、諧謔味ゆたかに、子ども自慢をしたものである。純素と恵芳なる幼い姉妹の日々のくらしのありようを、慈しみをこめてユーモアに現わしている。

この先、二十行の詩が続く。左思は身分低く、当時の人は軽んぜられたとい。当時の身分のない家の子弟の日常生活をリアルに描いたものとして、又、子どもに注がれる、親の視線をも探ることが出来る資料ではなかろうか。

責子（子を責む）

白髪は両鬢を被い、
肌膚復た実ならず。

五男兒有りと雖も、
総べて紙筆を好まず。

わが娘は、透きとおるほど色白で、歯ぎれよくおしゃべりをし、広い額に、白玉を連ねたような耳をもつ、と手放しでその美しさを自慢する。化粧台をいじくりまわし、筆をとつて金釘流で書き、習いおぼえたところを誦じている、と賢さの片鱗を披露する。

姉娘は、顔立ちは絵にかいたように美しい。二人の娘は庭をかけめぐり遊び、赤い花がほしくて、雨風の中を何べんでも取りに行く。ぬれた靴が山のようにたまる。鉦や缶の樂器の音がすると、とび出してそこらを歩きまわる。……こんなふうに子どもたちは好きなように振まつてすゞしていいる……とある。

阿舒は己に二八なるに、

懶惰なること故に匹無し。

阿宣は行々志学なるも、

しかも文術を愛せず。

雍と端とは年十三なるも、

六と七とを識らず。

通子は九歳に垂んとするも、

但だ梨と栗とを見むるのみ。

天運 苟くも此くの如くんば、
且く杯中の物を進めん。

陶淵明

五人の息子たちを、どれもこれも困った子どもたちで、と父親は嘆く言葉に慈愛を込め、軽妙にぐちある。

陶淵明は東晉（三一六～四二〇年）から宋にかけての詩人である。この詩人も、華麗を追う時代にあって官吏を辞し田園に帰し、くわを取り、平淡・自然の中で生涯を送った。

五人も息子がいるのに、どの子も、このようでは出世しそうもないと、この父親は思つたであろうか。いえ、自由人としてくらしている父親は、息子たちを、そのあり様をそのまま、受けとめて、慈しんでいるのである。しかも、無類の怠けものと思い切り言ってみたり、十五才で学問に志さねばならないのにどうも好きでないようだ、六と七の区別がつかない、梨と栗だのをねだるだけであると、頑はない息子たちを、おもしろがっているようしさえ思われる。

二つの古代の詩を、繙いでみた。この二つの詩の生れた時代は十五～十七世紀以前である。孔子、孟子の儒教は既に在り、老子、莊子の道教が流行した時でもあった。決して、平穏な時代ではなく、戦乱や天災は地を蔽つていた時代である。

二人の詩人は世に入れられず、へりくだらず、貧をよしとしくらした。

二つの詩は、古代の中国の人々の子そだてのありよう

を示しているものでなかろうか。

おとなが子そだてをおもしろがる、即ち、その遊戯性を大切にしたということ、その子そだての思想は、あらゆる時代の試練を経て、今も、中国に息づいているのではないか。

老莊の宇宙哲学と、孔孟の実践哲学を同時に生んだ、おどろくべき思考の沃野は、変革があつたとは言え、それだけの根があるはずである。

『紅樓夢』は宝玉少年をとりまく美女の物語であるが、これが不朽の悲劇であるのは、善美的少年少女がいつとはなしに消え去つてしまふ可憐哀感ばかりでなく、その中に、辣婦鳳姐や、強女尤三姐の言動をふくみ、人間臭のある深みとひろがりが加えられているからである。

この小説の社会のとらえようは、全体的に空間的に、四方八方にむかって手をのばす態度である。これは、又、二大思想の一致するところのもので、これが中国の伝統となり、「紅樓夢」を生み出した。

それ故にこそ、幾たびの変革を経た今の中国で、確實

に一層広く読み継がれるのである。

二つの古代詩、そして今も広く愛読される『紅樓夢』を通して、飛躍した表現であるが、"悠久の民"として息づく中国人ひとは、"一人だけの子どもを育てる"という現実を、その歴史の中の瞬時のできごととして、呑みこみ、生きるのであろうと思われたのである。

(かつこう文庫主宰)

(参考資料)

「中国名詩選」松枝茂夫編 岩波書店
「莊子」 福永光司著 中公新書

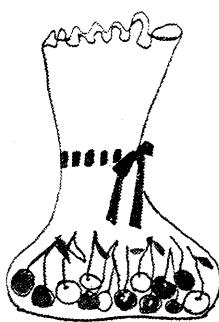
(注)

「錦の中の仙女」近藤伊津子再話・未刊

再び 保育の中の

小さなこと、大切なこと（4）

守 永 英 子



六月半ばの晴れた日の午後は、年長組の保育室は、ほとんどの子どもが庭に出ていて、部屋の中は、がらんとしていた。おべんとうのあとで部屋を整えていると、N夫が、庭から戻ってきて、入口のところで、「先生、先生」と気忙しく呼ぶ。「なあに」と答えると、「先生、大変だよ。一人を大勢でいじめているよ」と言う。急いで庭を見まわすと、庭の向うの隅に、プラスチックのバドミントンのラケットを、振り上げている、子どもたちの群がみえた。

事情が分らないままに、靴をはきかえて、現場に急いだ。近づいてみると、追われているのは、U男一人。攻撃をしかけていた子どもたち数人は、私の顔を見ながら、さつと、山の方へ逃げて行こうとしていた。

U男は、何故か、時々、攻撃の対象となる。体も大きく、知的にも進んでいるが、自分本位な振る舞いが多いのであらうか。

私は、逃げて行く子どもたちを、手招きして呼び戻しながら、どのように切り出したものか、と考えた。

表わされた行為をとがめることは容易である。しかし、それが、子どもの中にしみ込み、子どもの心持を変えていく布石となることは、むずかしい。

逃げた子どもたちが、呼ばれると、すぐに戻ってきたことは、私の気持を、幾分軽くしてくれた。私は、まず、子どもに、自分の気持をたどらせようと思つた。

「どうして、私の顔を見て、逃げたの？」

子どもたちは、顔を見合せたが、いつも素直なY夫が、間の悪そうな表情で、答えた。

「悪いことをしたから、叱られると思って……」

「悪いこと」って、どんなことをしたの？」

「一人を、みんなで、いじめたから」

思わず、けんかになつた、というより、どうやら、承知してやり始めたようである。

「なぜ、みんなで、Uちゃんをいじめようとしたの？」

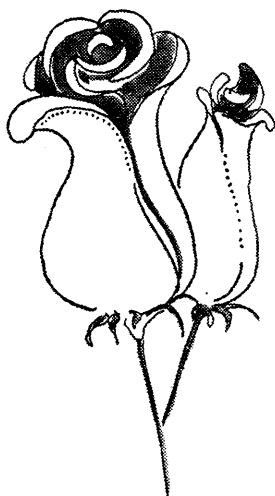
今までの冷静な空気を破って、Tが、憤慨に堪えない、といった顔で答えた。「だって、U男は悪いんだよ。この前も、まあちゃんを、けがさせたんだから」

私の心に驚きが走った。けがをさせたのは、もう何日も前のことである。しかも、U男が故意にしたことではなく、U男がこいでいたぶらんこの前へ、まあちゃんがころがったボールを追いかけてきて、ぶつかったのである。

「あれは、Uちゃんがわざとしたのではないのよ。間違って、そうなったのよ」

「間違ったのは、許してあげなきやいけないんだよ」と、横から、中立のE夫が、言葉をはさむ。誰からも、反論は出ない。

今度は、M夫が、おさまらないといった表情で、口をとがらせた。「もつと、悪いこと



をしたんだよ。人が、いやがることをしたんだ」

M、U、H、Tたちは、帰り道が一緒である。その時のことらしい。M夫の説明による
と、U男は友だちの名前を呼ぶときに、わざと、別の友だちの名前で呼ぶのだと言う。M
夫も、「T君」と呼ばれて、それを、「いやだ」と言つても、やめないと憤慨する。

「どうして、そんなことをするの?」とU男に聞くと、「だって、おもしろいんだもの。
"遊び"なんだ」と言う。そう言えば、以前にも、U男は、人が怒るのを試すようなこと
をして、「"遊び"で言つたことなんだ」と言つたことがある。それを思い出しながら、私
は、U男に、きつぱりと言つた。「言われた人も、楽しくなければ、それは、いい遊びで
はないのよ」

誰からも、反論はなく、双方が、認めたようであつた。

Hが、「ハイッ」と手をあげて、発言を求めた。「みんなで、仲よくした方がいいと思
う」平凡ではあつたが、Hの自発的な発言は、雰囲気を穏やかにした。続いて、A夫が、
自分からU男の前に進み出で、「Uちゃん、ごめんね」と詫びた。そして、私の方をみて、
にっこりとした。子どもたちの動きに、教わられた思いで、私も、ほっとし、「Uちゃんだ
って、ちょっと、いけなかつたのよね」と、言葉を添えると、U男も、素直にあやまつ
た。平和な空気が流れだが、その中で、M夫だけが、不快な表情で取り残された。

「Mちゃんも、"ごめんなさい"をすると、みんなで仲直りができるかしらね」という私
の促しに、Mも、ためらいがちに、泣々と、U男にあやまつた。

これで、無事に、事が終ったと思ったとき、私を呼びにきたまま、黙つて一部始終を見ていたN夫が、口を開いた。「Mちゃんは、本当に、心からあやまつたんじゃないよ。本当にごめんなさいをしたのなら、あんなに、こわい顔をしてないもの」

まことに、鋭い觀察であつた。私も、気持だけが、こだわりを残していることに、気づいていた。表情から、言葉と気持とのずれを、これほど、はつきりと感じとる力が、五才の子どもにあるということは、驚きであった。

日常の生活の、細々しい事柄の中でも、子どもは、母親や保育者から、いろいろと鋭く感じとっているに違いない。

子どもが、日々出会う小さな事柄の、一こま一こまが、子どもの心に何を残していくか、子どもの感じとる力の鋭さを知ったとき、そのことの大切さと、むずかしさを、しみじみと思つたのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

「塔の小公子」たち

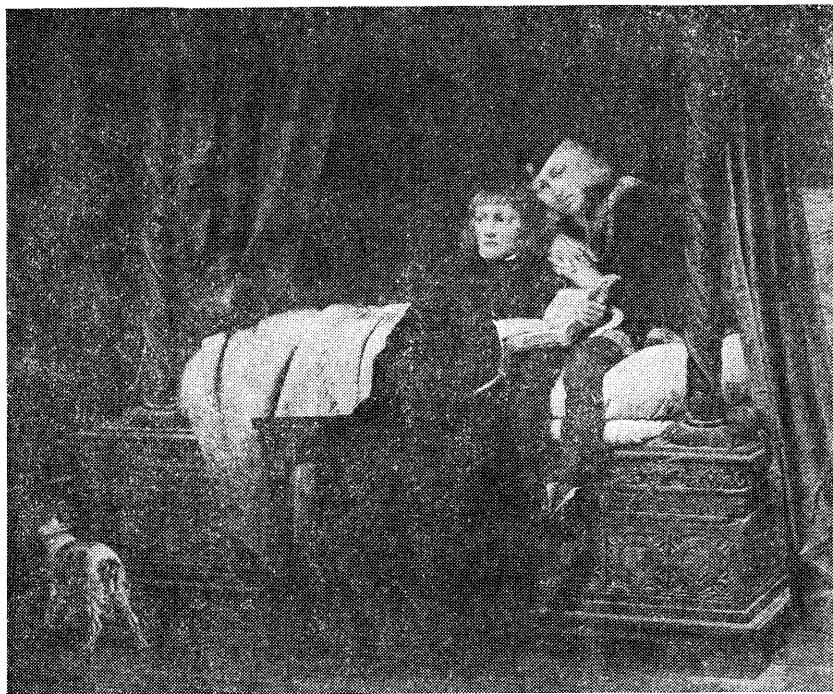
——シェイクスピアと絵画——

村上 健

パリのルーヴル美術館に、フランスのロマン派画家ボーエル・ドラローシュ（一七九七—一八五六）の描く『エドワードの子供たち』という一枚の油彩画がある。歴史画と肖像画を得意とし、サロン（官展）を中心に活躍した当人の人気画家ドラローシュがこの絵を制作したのは、ルイ・フィリップの七月王政が成立した一八三〇年のこと。ちなみに、同じ年には、彼より一歳年下のロマ

ン主義絵画の巨匠ドラクロワが、『民衆を導く自由の女神』を完成している。

画題に見える「エドワード」とは、英國ヨーク王朝の初代国王エドワード四世（在位、一四六一—七〇／七八三）。英國の王位繼承権をめぐって、赤バラのランカスター派と白バラのヨーク派に國論を二分し、骨肉相争う血なまぐさい戦闘が続けられたバラ戦争（一四五五—八五）のさなか、ランカスター家の国王ヘンリー六世を破つて王冠を手に入れた人物である。内乱に揺れ続ける国政に憂いを残したまま、彼が一四八三年にこの世を去ると、後には三人の子供たちが残された。長女エリザベスは十八歳、十三歳にして王位を繼承することになった長男のエドワード、そして、その弟ヨーク公爵のリチャード（十一歳）である。やがてエリザベスは、権謀術数の渦巻く世にあって、一四八六年、ランカスター家の血を引く、バラ戦争最後の勝利者ヘンリー・テューダー（戴冠してヘンリー七世）と結婚し、英國ルネサンスの花開く



弟たちは、父エドワード四世の死後、虎視眈々と王位をねらっていた、先王の弟で彼らの叔父にあたるグロスター公爵リチャードの野心の犠牲となり、ロンドン塔の一室で暗殺者に絞め殺されるという悲劇的運命をたどる。

ドラローシュの筆が描き出したのは、薄暗い室内に置かれたベッドの上で互いに身を寄せる二人の王子のもとに刺客の手が迫る一瞬だろうか。憂いに沈んだ様子で小首をかしげ、兄に体をもたせかけるリチャードに対して、兄エドワードは、何かの物音にハツと気づいたかのように、画面左手に鋭い視線を投げかけている。二人の足元にいた小犬も、侵入者の気配を察してか、廊下の明かりがかすかに洩れるドアに向かつて身構える――。

不気味な緊迫をたたえたこの絵画の背景となる史実を題材とした文学作品といえば、ウィリアム・シェイクスピア（一五六四—一六一六）の初期の歴史劇『リチャード三世』を思い起こす人も多いだろう。あらゆる策謀を用いて王位を篡奪したグロスター公リチャード（＝リチャード三世）が、ボズワースの戦い（一四八五年）でへ

シリード・テューダーに敗れるまでを描いたこの戯曲に、次のような場面がある。四幕三場の冒頭、リチャードの命を受けて二人の王子を暗殺した騎士ティレルは、舞台上に登場するや、その時の様子をこう観客に独白する。

残虐非道な仕事もこれでやつとかたがついた。

これほど無惨な人殺しは、イングランドの歴史のどのページをくつてみても例があるまい。おれがこの

残忍きわまりない血みどろ仕事に引きやりこんだ

ダイトンとフォレストの二人は、名うての悪党、血に飢えた犬でありながら、さすがに人間としてのあわれみ心に胸が熱くなつたらしい、王子たちの死に際しては物語のなかの子供のように泣いていた。

「こうやつて」とダイトンは言つた、「一人は寝てい

た」

「こうやつて」とフォレストは言つた、「おたがいにアラバスターのように白い腕をからみあわせていた、

二人の唇は一本の茎に咲く四つの赤いバラの花だ、それが初夏の光に美しく咲き誇り口づけしあつていた。

枕もとに一冊の祈禱書があった、それを見て

とフォレストは言い続けた、「決心がぐらついた、ところが、畜生」——と言つてあの悪党め口をつぐんだ。

するとダイトンが引きとつた、「おれたちは、自然が

ものを造りはじめたとき以来の最高の傑作、もつとも美しい作品を絞め殺してしまつたのだ」

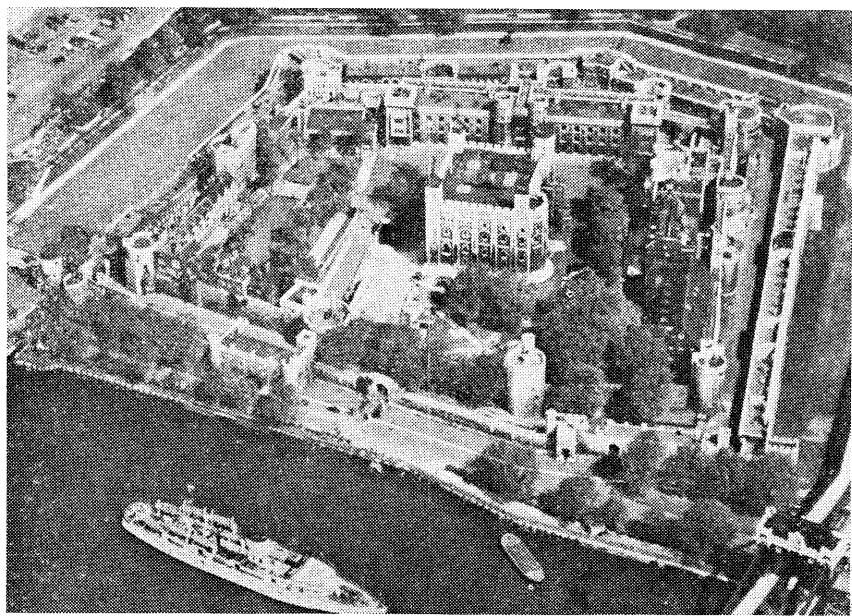
そこまで言うと、二人とも良心と悔恨にさいなまれ、口もきけなくなつた。おれはそのままそこへ二人をおいてきた、残忍な王のところへ知らせに行くために。

(小田島雄志訳)

この箇所は、『リチャード三世』の中でも、短いながら印象的な場面だが、台詞を語るティレルという人物は、作品全体を通して一度登場するだけのほんの端役にすぎ

ない。しかし、その端役にして、ひとたび舞台に現れるや、これほどの台詞を喋ることが許されるのが、シェイクスピア劇の大きな魅力の一つだと言えよう。もう一度、前の台詞を読み返していただきたい。ティレルは、王子殺害の模様を直截的に説明したりせず、仲間の悪党の行動を語り、彼らの言葉を再現することによって、人間、心理を通して、見た事件の意味を、我々に吐露している。「名うての悪党」でさえ心底に抱く、憐れみの情と良心の呵責。それにもかかわらず王子を絞殺してしまう、人間の残虐さや金銭欲・昇進欲の浅ましさ。そして、二度と取返しのつかぬ罪の重大さを悟るのは、いつでも、その罪を犯してしまってからだということ……。自らも加担した王子殺しを「殘虐非道な仕事」と呼び、その命令を下したリチャードを「殘忍な王」と形容することで閉じられるこの台詞は、単なるティレル個人の告白ではなく、観客の心情を代弁する役割さえ果たしている。

この台詞を読んで、「ドラローシュの描く二人の王子は、眠っていなかつたではないか」などと言うのは、も



ちろん野暮といふもの。シェイクスピアにせよ、ドラローシュにせよ、過去の歴史に想像力の翼をはばたかせ、人間の真実に出来る限り迫ろうとしたにすぎない。

エドワード四世の二人の息子が、それはかない命を散

らせたのは、旧ロンドン市街の東外れにあるロンドン塔のプラディー・タワー（血塔）である。ルネサンスの寵児サー・ウォルター・ローリーが幽閉された場所でもあるこの塔は、建造当初、ガーデン・タワー（庭塔）と名付けられていたが、何時の頃からか、「血塔」という呼称で知られるようになった。一説によれば、この二人の王子が此處で暗殺された為というが、眞偽のほどは定かでない。また、エドワードとリチャードの二人も、以後、「塔の小公子たち」と呼ばれる事になる——。

〔付記〕 一九〇〇（明治三十三）年、官命を受けて英國に留学した夏目漱石は、ロンドン到着の三日後（十月三十一日）にロンドン塔を訪れ、帰朝してから、『帝国文学』に「倫敦塔」なる散文を発表した。シェイ

クスピアやドラローシュに触発されて漱石が描き出した部分を此處に重ね合わせれば、読者の興味は一層かきたてられる事になるだろう。

（津田塾大学）

若いお母さんたちへ

帰国して三度目の春に

はるにれの会 塚 田 幸 子

月日のたつのは早いもので再び春がめぐつてきました。一年前に書いた自分の文章を読み返してみると、その頃ですらまだ、アメリカでの生活を充分に消化しきっていなかつたのだという思いがします。今そう言えるとい

うこととは、今になれば当時のことが真に過去のことになり、多少とも冷静に客観的な見方

ができるようになつたということでしょう

ができます。ひとつにはそれが原因するの

か、長女が中学生になった途端、私は母親というより先輩として口うるさく長女の言動に干渉を始め、望ましくない母親を演じていま

年生にまでなつてているのですから。

その間に私自身は三十八歳、俗に言う「お

ばさん」の中でも相当しっかりおばさんで

す。ところが、自分の意識としてはむしろ長

女と肩を並べる中学生からよくてせいぜい大

学生なのです。ひとつにはそれが原因するの

か、長女が中学生になった途端、私は母親と

いうより先輩として口うるさく長女の言動に

した。自分が記憶している自分自身の中学生時代の行動の価値基準をいちいち長女に当てはめてこうしなさい、ああしなさいと言い始めたのです。娘にいやがられるとわかつていいながらも、湧き上がってくる思いを三度に一度は押さえられなくなるということだったでしようか。

中学生時代の私はすべてにおいて完璧主義者だったように思います。二十数年も前のことをだから恐らくその間に都合の悪い所は記憶に残らず、良い所だけが残ってしまった可能性は大なのですが、始めの内はそんなことすら頭に浮かばず、長女があい変わらず小学二年生の妹と本気になつてケンカをしたり、「一緒に遊んでくれない」とふくれたりするのを見て、もう中学生なのに……と思つてしまつたのです。

考えてみると、私が中学生になつた頃は、

一言で言つてしまえば今とは時代が違うということであり、服装の点で見てもまだまだ赤やピンクは女の色等の枠がはつきりしていた時代でした。今は逆に男の子が赤やピンクを着て、女の子は黒やグレーを好んで着る時代です。服装だけ見ても昔のような男女の別、大人と子供の別、老人と若い者の別はなくなつているのだとすることがよくわかります。

そういう自分自身、大学時代には、パンタロンと称して男子専科であった正式の場での女性のズボン（今ではこれもパンツ？）着用の動きの一翼を担つてきたのです。ミニスカートに始まり、ジーンズが代表した老若男女に区別を作らないという服装の革命は、服装だけにとどまらず、あらゆる文化、社会状況が同様に変革されていくことの予兆として意識されていたはずでした。その私が今になつて娘にお説教や小言を言う図はどうもおかしい

のですが、それをやめることができずに一年

近くがたつていたのでした。

さるを得ないのでした。

例えば、今、女の子たちは小学校の高学年あたりから、まるで男女が逆転したように乱暴な男言葉を使い始めますが、長女の場合、帰国したのが小学五年も終わりの頃でしたので、長女のそんな言葉が私の耳に入り始めたのがちょうど中学生になった頃からでした。女の子だから（男の子だから）こうすべき（すべきでない）という男女の規範の違いを、私たち両親はできる限り排除してきたりでしたけれど、聞いていて不愉快になるという事実の前に、大人になつたらそれでは通らないという理由等を並べたてて、「……しろ」だの「てめえ」だのと言わないようになり度々、厳しい口調で叱りつけたものです。それはまた、姉が妹に対して使っている場面でしたから、妹への影響を考えると余計神経質になら

うてきて、深く考へる暇もないままに対応せざるを得ないわけですが、そんな時にうろたえて感情的になつてしまつては、自分自身が脱し切つていなかい価値観が頭をもたげてきて、とつさのことにつづいて出るのです。一度や二度でなく、何度もくりかえされた親子のやりとりで、長女に対して私は用心深く「女の子なのだから」とか「女の子のくせに」等の言葉は使わないよう心がけていましたが、これまでのところは何とか切りぬけてきています。

そこで一息入れて考へてみると、親が心配するほどに、娘たちは脱線してはいないといふのが本当のところでしょう。多分彼女たちも一種の流行のように男言葉を使ってみていいのでしょう。一生使い続けていくと考える

方がむしろおかしいですし、一日中そんな言葉を使っているのでありますから。ちょうど自分たちが何となく流行にのつてしてきただように、古い、そして合理的でない価値観への、ささやかではあるけれども結果としては大きなうねりとなる若い世代からのチャレンジとみて、深刻に考え過ぎないようにするというのが答でしようか。それにしても若い人たちからチャレンジされるほどに古くなってしまった自分たちのことを思い、驟然となります。

こうして今回、中学生の母親としてのテーマを敢えて記すことになりましたが、それについては、私自身迷わずにいられず、その迷いがペンを取るのを遅らせてしまいました。というのも、「幼児の教育」という本誌のタイトルにどうしても「だわらざるを得ない自分自身がいて、「はるにれ」のメンバーからは励まされても、まだ一步踏み切れない心境が続いていたからです。幼児もいすれは成長し、遠からず似たような体験をすることがなるお母さんたちに宛てて書くのだと自分に言い聞かせて、こだわり続けていたわけです。次女について書ければ、ほんの一歩先と、いうことで、私自身納得がいったのでしょうかが、何につけても初めてのことはいつも私の中で最も大きな比重を占るので、ためておいた分、今は中学生の長女への傾きが大きいのです。

長女は今、区立中学校へ通つており、来春には高校受験が待ち構えています。初めての受験ということで、当人よりも私の方が不安だったのです。両親が共に公立校一本だったため、単純に都立の普通科を考えていたのですが、長女の友だちの何人かは中学からすでに私立へ行つており、その人たちの話を聞く

とそういう道も悪くはないなと考えてしまふのです。今までの選択も絶対とは言えず、これからのことでも確信はありません。当人が不満をもらすわけでもなく、特別の希望を言うわけでもないので、大幅な方針転換はないでしようが、この先も私はいろいろ考え、迷いそうです。

今では過去となつたデンバー時代も、子どもの学校を選んでから居住地を決める（あるいは替える）という日本人が多い中で、それをせずに通したのでした。前にも書いたように、デンバー市内に住むと、黒人等の多く住む街区と白人の多い街区（学区）の間で相方のパブリックスクールの半数ずつの児童・生徒をバスで、対になつた相手先の学校へ連れて行き、一校の白人と黒人その他の混成比が人口比に近くなるように無理にでももつていうとする強制バス通学制度があり、一方、

市外の郡（カウンティ）にはこの制度が適用されないので、強制バス通学による学力低下を嫌つて、経済的に豊かな白人はデンバー市外へと移り住んでいくという動きが起こり、法律が意図していたような構成はますます崩れていつてゐるのでした。市内に残された生徒は、経済的にも貧しく、読み書きどころか、英語を話すことすらできない者もいて、その平均的な学力は低下する一方です。この悪循環の中で、引越しができない人々は数少ない一貫教育校に早くから申し込んだり、私立を選ぶという以外に方法はありません。

我が家では、アメリカに三年ほどしかいなといいうことがあらかじめわかつていましたし、全く英語が話せないという点では、長女はインディアンやベトナム難民の子どもと同様、平均学力を下げる方のむしろ加害者であつたわけですから、引越しもせず、私立をあ

たることも家庭教師をつけることもせず、黒人の多いパブリックに通わせ続け、結果としてはその中で最優秀生徒というごほうびを頂くまでになったのでした。三年という短い年月を思えば、学力レベルが低いと言われる学校内であっても、これは感激的なことでした。

帰国してからの長女は、デンバーでの苦しい努力の毎日の疲れを癒そうとしているかのように、その後の三年をのんびり楽しく過ごしてきました。帰国直後に有無を言わせずに塾に行かせるということ、他家の多くの例のようにあるいはできたかもしませんが、私はできませんでした。人生を長い目で見れば、張りつめた後に緩む時期も必要でしょうし、友人を競争相手としか見ない、単一の価値観が支配する場に追いやることには抵抗があるからです。私自身は中学時代に最大最善の努力をして、当時充分報われ

たように思つたものの、その後に続く高校時代は反動としての挫折であり、今に至るまで苦渋の根源であり続けたという事実を前にして、長女の進む道に私が勝手にレールを敷いてしまうということはできないと思ったのです。

過去を振りかえると、楽しかった、しあわせだったと思えることがあり、現在まで引きずり続けていた苦しみや痛みがあります。折につけ、何度もたちかえつてその意味を新たに問い合わせる必要のあるような重い体験が、誰にでもひとつやふたつあるのではないでしょうか。そうしてみると人の歩んで行く道はどうもまっしぐらの直線ではなく、曲がりくねっているような気がします。短期的にみると一直線に見えることがあっても、それはもつと大きな曲線の一部だったと後になつて気付くように、時には前方への目標を見失うこ

ともあるのです。別れ道で選び取らなかつた方の道に再びもどることはできないわけですが、道は意外にもらせん階段のように、似たような重要な岐路に何度もさしかかるらしく、そんな時ふと、過去の体験が蘇えつて新たな選択の助けになつたり、逆に妨げになつたりします。

長女が中学生になつてから、私は長女と自分を独立した人格としてみると困難になつてゐる。背丈では私をとうに追い越しながら、背中を丸めてごはんを食べたりする長女を見ると、自分は中学生の頃には意識的に姿勢を正しくしようと努めたものだつた等と長女のすることなすことが目障り、耳障りでつい口やかましくなつてしまつた。こうして学業成績にも交友関係にも厳しい見方が始まつたのです。

長女がまだ小学生だった内は、私はそんな

に感情的にならずにいらされたのに、急に変わつたのは自分でびっくりするほどでした。

私は長女の方が突然変わつたのではないといふことが自分でわかつていましたから、原因(もんだい)は娘にではなく私自身にあるのだということも内心ではわかつていました。が、かと言つて湧き起つてくる感情を自分でコントロールすることができないのでした。

こうしてみると、満足していたはずの自らの中学時代という記憶もずいぶん危うげなものだつたかもしれません。自分では最も輝かしく明るい時代と信じて疑うことすらなかつた当時のことも、今、改めて娘という鏡に照らしてみると、今では少しも得意に思へないと思えることや、考えが足りなかつたと思われる事がいくつも出てくるのです。

それは私が当時を回想して語つたことに対し

て娘の口から直接の批評として言われたこと
もあれば、語る内に気づかされたこともあ
り、その瞬間、私は中学生当時にタイムスリ
ップしたような気がして、娘の方が私よりは
るかに頼もしく見えたものです。

逆にまたまっ暗にしか思えなかつた高校時
代というのも、そうしてみると光の部分を持
つており、正当な評価を持っているのかもし
れないという気になってきました。けれど、
こちらはまだ少し時間がかかりそうです。

初めての赤ちゃんとして、生まれたばかり
の長女を抱いた時、私は嬉しさよりも、その
生命を丸ごと守り育てていかなければならな
いという責任のあまりの重さに圧倒され、半
ばたじろいでしまったことを忘れることがで
きません。かわいいと思えるゆとりは、その
後三、四ヵ月もたつて後、母乳だけでここま
で育てたという実績に支えられてやつと、こ

の子にとつてかけがえのない母親になれたと
いう思いがしてから生じてきたのでした。誰
にでも子どもを育てることはできるのだから、誰でもがこの子の母親になり得るけれ
ど、それゆえにこそ、自分の産んだ子が、自
分をかけがえのない唯一無二の母親として認
めてくれることを私は切望したのでした。そ
れは理屈的に考えて望んだというのではなく
く、出産の半月前から同居し始めた夫の両親
の初孫への期待を目の当たりにしてからムク
ムクと湧いてきた我が子への動物的な執着、
独占欲とでもいうものから発していたよう
思います。この執着はひょつとして今なお続
いているのかもしれません。

良い母、立派な母にならなくてはという気
負いは、次女の出産と共にかなり消失したも
のの、初めての事に際して等、時々顔を出す
ものようです。一方、気負いを捨てて、自

分の気持ちのおもむくままに育ててきた次女

ですが、その三歳から六歳までの三年間を自由の国アメリカで過ごしたことは、私にとってその意味を深めるできごとでした。

堂々と人前で、愛する者同士が抱き合い、口づけするという社会で、私は、長女の時に思はずしてすることのできなかつたキスや抱擁を次女に対してはてらいもなくしてみると、それができ、そうすることが、どんなに自分にとって心地よいことか、身をもつて味わうことができたのです。それまでの日本人としての行動様式を捨てて、アメリカ人のようにあるまつても、当人も周囲も奇異に感じないで、むしろ自然に受けとめられるのは次女の年齢が大きく影響していました。長女はすでに日本人としてのアイデンティティーを確立していて、私は夫に対するのと同様、長女に接する態度を大きく変えることはできません

でした。

けれども長女は、私と次女の接する様目の前に見ています。人がその心を表わす手段として多様なものを持っているということや、新たな手段を獲得することもできるということを長女もたくさん学んだはずです。最も重要な手段である言葉を失って、苦しんだ体験は、私の想像以上に、長女にとって重いものだったようで、つい先日の作文にも書いてあつたくらいです。

いつの日か、苦しかった体験に、相当の意味を与えられるようになることを、自身の体験と共に、長女の体験についても祈りたいと思うこの頃です。

老後をオーストラリア、カナダ、スペ

インなどで過ごそうと考えている人が多いようだ。

日本と比べ家の価格も安い。常日ご

ろ、狭い家に住まざるをえない日本人に

とって、広々とした家は憧れである。しかもこの所、地価の急騰で、マイホームを持つことは、夢のまた夢となつた。

平均的サラリーマンが、部長クラスに

なつたとして、かせげる金額は、二億円といわれている。しかし、その中で、家

族を養なつてゆくわけだから、手元に残

る金額は、それほど多くなくなる。

有料老人ホームに終身はいるには、四

一五千万円はかかるから、その金で、広々

とした海外に住もうとするのは、むしろ

よくわかる発想といえるかもしれない。

ただ、長い間、海外生活を経験した人

ならわかるだろうが、海外で住むというのは、短期間訪れる旅行とは大きな違いがある。ことばを自由にあやつれるなら

ともかく、カタコトのことばでは、生活はむずかしい。よほど人間嫌いで、人とコミュニケーションをとりたくないと思うなら別だが……。

また、医療体制も十分ではない。日本

人医師が現地で働くには、その国のライ

センスが必要である。もし病気になつた

ら、現地の医師に自分の状態をしつかり

伝えられるのだろうか。

日本人村といわれるすべての施設が備

わっているものの建設を考えているよう

だが、それが実現されるには、まだかな

りの時間もかかるだろうし、また、ひと

つの国に、別の国民が集団で住む地域を

作ることには、様々な問題がある。

ブラジルにしろ、ハワイにしろ、日本

人の多い地域も、先駆者達の並々ならぬ

努力があつてからこそ、根づいたものな

のだ。ただ広い住宅に住めて、物価も安

いから、行つてしまおうというのは、あまりに安易な発想ではないだろうか。

幼児の教育 第八十六巻 第四号

四月号 (C)

定価 四〇〇円

昭和六十二年三月二十五日 印刷
昭和六十二年四月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
发行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日 本 幼 稚 園 協 会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所

図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーべル館
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

保育の再点検〈全5巻〉

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。



- ①望ましい生活習慣 ②望ましい集団づくり ③望ましい当番活動
④望ましい行事と生活 ⑤望ましい言葉の指導

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える

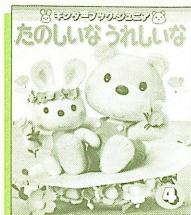
キンダーブックの

フレーベル館

保育9誌の新しい企画、夢が大きくひろがります。

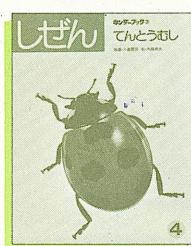
はじめての生活絵本
キンダーブック ジュニア

創刊



★ L 判 / 22 頁 / 付録母親向け解説書「くま通信」
4月号特別付録「たのしいシール」「こいのぼり」/ 250円

自然の不思議を 感動的に伝える
しせん —— キンダーブック③



★ L 判 / 32 頁 / 上製本 / 特別付録「こいのぼり」/ 330円

絵本を開く楽しさをあたえる
キンダーメルヘン



★ L 判 / 28 頁 / 特別付録「こいのぼり」/ 250円

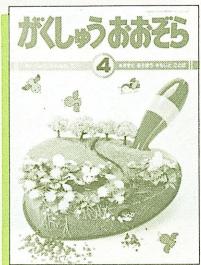
- 年少児を対象とした総合生活絵本。
新しい心の芽ばえを育てる豊かな題材をお届けします。

ゆたかな情操と創造する心を大切にする
キンダーブック①(情操)



★ A4 ワイド判 / 36 頁 / 特別付録「ワイド版カラー工作」「おともだちシール」「こいのぼり」/ 280円

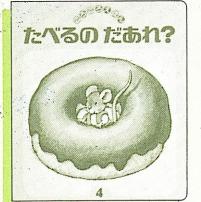
幼児の学習意欲を 生みだす
がくしゅうおおぞら



★ A4 変形判 / 36 頁 / 別冊付録「おかあさんのほん」/ 特別付録「あいうえおひょう」「こいのぼり」/ 300円

- 子どもの興味と関心の芽ばえに、身近な生物を通してやさしく語りかける科学絵本。
美しいスーパー・リズムの世界！

園生活で
はじめて出会う絵本
こころえほん



★ A B 判 / 20 頁 / 特別付録「こいのぼり」/ 250円

- 年中児を対象とした生活絵本。
季節感・生活感を盛りこんだおはなしです。
「特集」となどを、楽しく展開していきます。

観察する目と 考える心をそだてる
キンダーブック②(観察)



★ A4 ワイド判 / 40 頁 / 特別付録「めいろブック」「ワイド版カラー工作」「シール」「こいのぼり」/ 280円

夢と感動する心を そだてる
キンダーおはなしえほん

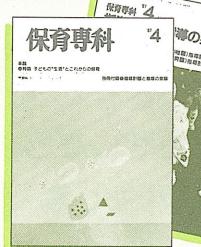


★ L 判 / 32 頁 / 上製本 / 特別付録「こいのぼり」/ 330円

- 子どもたちの生活感を盛りこんだおはなし絵本。
成長をそだてるお手伝いをします。

● 子どもたちの夢と感動する心を大切に
はぐくむおはなし絵本です。

保育専科



● 教育要領改訂の方向によって、幼児教育の内容を明らかにしていきます。
定価400円
別冊付録つき

'87フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館